

た、装飾工芸美術の発達は、山車にも取り入れられ、山車は江戸時代に総合的な芸術品として、各地に精巧なものが出現した。

日本の山車の起源は、京都の祇園祭の山（四輪車の台上に人形の作り物をのせたり、松をたてたりしたもの）と鉾（四輪車の上に人形・囃子方のの二階屋台をつけ、屋根の上に長い柱をつけたもの）であるといわれている。現在各地の祭礼に出ている山車の多くは、この祇園祭の山・鉾の影響を受けているといわれているが、実際には前ページの表1のように、いろいろな形に分化している。これは、各地の人々の創意工夫が加わっていることも一因ではないかと思われる。

なお、山車は日本以外にも存在しており、例えば、インドにも山車を中心とした祭りがある³⁾。

3. 山車の出る祭

山車が出る祭りは、岐阜県下にも高山祭りをはじめ、数多く存在する。西濃地方においても、大垣祭りや垂井祭りなどがある。今回は、岐阜県重要有形民俗文化財の山車が出る揖斐郡揖斐川町の揖斐祭り、大垣市の大垣祭り・綾野祭り、養老郡養老町の高田祭り・室原祭り、不破郡垂井町の垂井祭りを中心に取り上げて考察する。

(1) 山車の名称・奉納芸など

(ア) 揖斐祭り（三輪神社）－ 5 輛

- ・高砂軸（上町）－ 子供歌舞伎
- ・住吉軸（中町）－ 子供歌舞伎
- ・鳳凰軸（下町）－ 子供歌舞伎
- ・竜宮軸（上新町）－ 子供歌舞伎、軸蔵棟札
「安永四年乙未歳出来候」

(イ) 大垣祭り（八幡神社）－ 9 輛

- ・神楽軸（本町・中町・新町年々交代）－ 俗に市山車、操り人形（操法は特異なもの、青装束で神楽を舞う少女、白装束で湯の花を捧げる山伏）人形4体、一層四輪、名古屋式。
- ・大黒軸（魚屋町・竹島町・俵町交代）－ 人形（大黒）
- ・恵比須軸（船町・伝馬町・岐阜町・宮町交代）－ 人形（恵比須）

以上の3つの山車は、「三輪山」といわれ、延宝7年（1679）に藩主戸田氏西が造った柵車の後身であるといわれている。この3輛は他の現存する6輛の山車と全く異質な構造を持っている。囃子は山車のうしろについて行く。

- ・鯰軸（魚屋町）－ 操り人形（からくり人形・瓢箪を持った老人が、水上に躍り狂う大鯰を押える身振り）、人形2体、二層四輪、地作
- ・管原軸（新町）－ もと船山車（竜頭鶴首の御座船形）、操り人形（からくり人形、童子が筆で文字を書く）人形3体、二層四輪、京都式



図1 西濃地方における岐阜県重要有形民俗文化財の山車が出る祭り

- ・神軸（竹島町）—もと朝鮮軸（朝鮮人来聘の行列を模した）、操り人形（からくり人形、天鈿女命が神と鈴をもって神楽を奏する。）人形2体、二層四輪、名古屋式
 - ・玉の井軸（船町）—もと操り人形（からくり人形）、文化12年（1815）流失、その後前山車に舞台をこしらえて芸軸とした。少女舞踊。
 - ・松竹軸（伝馬町）—もと操り人形（からくり人形）、戦災で焼失、現在は芸軸（少女舞踊）ではあるが、からくり人形（童女が変じて白兔となり、餅臼をきねでつく変身からくり）もある。二層四輪、名古屋式
 - ・愛宕軸（岐阜町）—操り人形（からくり人形、武内宿祢が末広を開き弓八幡を舞うが面冠りで「神体」に変面する。神官の持つ小箱をあけると二羽の鳩が現れ、頭を上下にふって、豆を拾う）、人形4体、二層四輪、名古屋式
- (ウ) 綾野祭り（白鬚神社）—5輦
- ・神楽軸（東瀬古）—〈一軸〉ともいう。操り人形（大垣の神楽舞操法と同じ。鈴と御幣を持つ巫子が、囃子に合せて舞う。白装束の山伏が湯の花を捧げる）、二層四輪、文政年間製作、名古屋式
 - ・獅子軸（八幡瀬古）—もと大垣伝馬町所有（「宝暦七丁丑四月吉日伝馬町」）、青年や子供の踊りやにわか。弘化年間製作、折衷式
 - ・小獅子軸（立町瀬古）—操り（糸からくり、小獅子が壺とたわむれるように、壺が割れて牡丹の花が出る）、文化年間製作、名古屋式
 - ・猩々軸（大門瀬古）—操り人形（からくり人形、猩々人形の前に酒壺があり、首をさげるとむ格好をして、頭をもち上げると赤ら顔に変わる。）文政年間製作、名古屋式
 - ・鯰軸（横町瀬古）—操り人形（からくり人形、赤頭巾の老人が瓢箪をもって鯰をとりおさえる）、二層四輪、宝暦年間製作、名古屋式
- (エ) 高田祭り（愛宕神社）—3輦
- ・猩々軸（西町軸）—操り人形（からくり人形、赤毛の夫婦猩々が舞いおさめて、かめから酒を飲みかわす）、人形2体、二層四輪、文政5年（1822）再建、名古屋式
 - ・からくり人形軸（東組軸）—林和靖車ともいう、操り人形（からくり人形、林和靖が読書していると、鶴がきて菜の葉をつんで彼に食べさせようとするが、その鶴を唐子が追い払おうとする。鶴の羽ばたきのからくりが絶妙）、名古屋伝馬町より古軸を購入、人形4体、二層四輪、名古屋式
 - ・神楽獅子軸（下川原軸）—獅子神楽、天保元年（1830）岐阜長良北町より購入、二層四輪、名古屋式
- (オ) 室原祭り（熊野神社）—3輦
- ・万歳閣（井畑瀬古）—子供歌舞伎、現在は浄瑠璃語り、垂井の中町から購入したのではないかといわれている。長浜式
 - ・鳳凰軸（東向瀬古）—子供歌舞伎、現在は年長の青年2名が、紋付羽織袴姿で舞台に正座、前身は近江の醒ヶ井から購入したのではないかといわれている。現在の軸は、赤坂東町より購入。長浜式
 - ・臥竜閣（色目瀬古）—子供歌舞伎、現在は年長の青年2名が、紋付羽織袴姿で舞台に正座、前身は文化5年（1808）垂井西町の軸を購入、のち安政元・2年（1854・5）ごろ新しく造りかえた。長浜式
- (カ) 垂井祭り（八重垣神社）—3輦
- ・攀鱗閣（西町）—子供歌舞伎

- ・鳳凰閣（東町）－子供歌舞伎
- ・紫雲閣（中町）－子供歌舞伎⁴⁾

以上が岐阜県重要有形民俗文化財に指定されている山車である。指定外で現存する山車としては、次のようなものもある。(現在祭りに使用されていない山車も含む)

- ・高田祭り－歌舞伎軸（常盤町，子供歌舞伎・子供手踊り，長浜式）
- ・揖斐郡池田町－下東野市軸（からくり人形）
- ・揖斐郡池田町－片山市軸（からくり人形）
- ・大垣市赤坂町－子安町軸（歌舞伎）
- ・大垣市久瀬川町－軸（からくり人形）
- ・養老郡養老町根古地－太鼓軸
- ・養老郡上石津町一之瀬－桃源閣（子供歌舞伎，明治4年造立）

過去に存在していた山車としては、次のようなものがあった。

- ・揖斐郡大野町稲富(来振神社) 3 輛
- ・大垣市－戦災で焼失し，復活しなかった山車，相生軸(本町)，浦島軸（表町），布袋軸（中町），猩々軸（宮町），全てからくり人形を奉納した。
- ・大垣市赤坂町－羽根町（西町）軸，新丁（南町）軸，田中町（元町）軸，東町軸，全て歌舞伎を奉納した。なお，東町軸は幕末の頃，揖斐中町の山車を買い，後に不破郡合原村室原（現養老郡養老町室原）に売られた。
- ・大垣市久瀬川町－軸（からくり人形），戦後大垣市に売られた⁵⁾。

以上の山車を大きく分類すると，子供歌舞伎などを奉納する山車（芸軸）と，からくり人形を奉納する山車に分けることができる。子供歌舞伎などを奉納する山車が中心の祭りとしては，垂井祭り，揖斐祭り，室原祭りがある。なお，赤坂の秋祭りも同様であった。一方，からくり人形を奉納する山車が中心の祭りとしては，大垣祭り，綾野祭り，高田祭りがある。図2を見て分かるように，狭くわりに近い地域の中に2種類の祭りが存在している。なぜ，このように異なるのであろうか。この問題は，今後の研究課題ではあるが，次のような点が考えられるであろう。第1－上方歌舞伎の影響と竹田からくりの影響，第2－長浜（子供歌舞伎）との関係，および名古屋・犬山（両方ともからくり人形）との関係，第3－各地域相互間の関係，第4－各地に以前からあった民俗芸能との関係，第5－交通路と商品流通，第6－上記の全てに関係するが，各地域の歴史の違いなどである。上記の第2～4について，簡単に触れておく。

第2については，垂井祭りと長浜曳山祭りについて見てみる。垂井で祭礼と共に歌舞伎が行われた最も古い記録は，明和9年(1772)に「日高川入相楼(安珍清姫)」を，西組が当番で演じている⁶⁾。

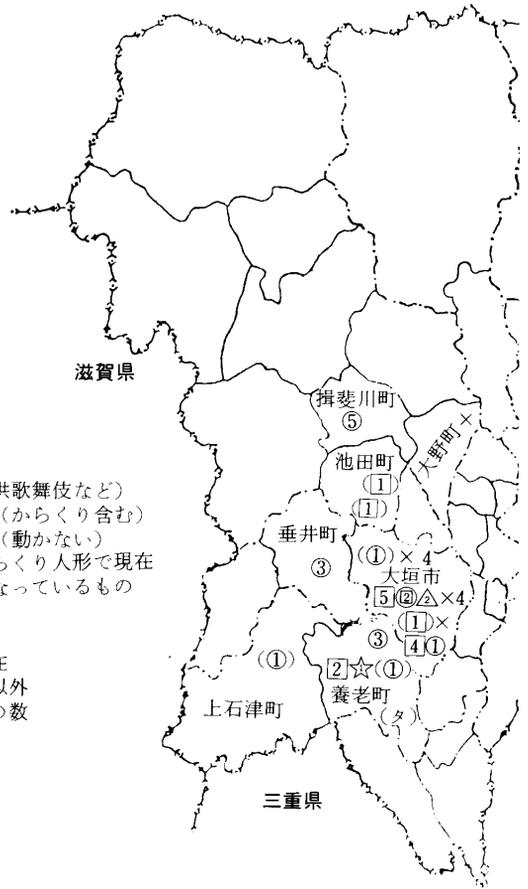


図2 西濃地方における山車の奉納芸による分類

一方、長浜では明和年間（1764～72）に「山の芸」が行われていた記録がある⁷⁾。

次に祭りの諸行事を見る。

・垂井祭り

- 3/1 初集会—祭典委員、祭りの計画
 4月上旬 軸の点検、芸児集め、芸題定め
 4月中旬 三役揃い、初顔合せ、稽古初め
 4月下旬 稽古納め、軸飾り

5/1 足揃え、狂言—はじめて曳軸で、浄瑠璃
 三味線に合わせて芸を演じ、三日間の祭礼
 が無事に終ることを祈る

5/2 <試楽> —————

- 11:00 軸を曳き回し、各町内で奉芸
 18:00 登り軸—八重垣神社へ軸を曳いて
 ゆく 献灯
 一番軸だけが奉芸
 下り軸—軸は各町内へ帰る

5/3 <本楽> —————

- 0:00 起きたり—各家の表戸をたたき起こ
 してまわる
 2:30まで 八重垣神社に軸を並べる
 12:00 古式練り込み行事—役者・青年・中
 老たちが、町を練りながら八重垣神社
 へ向かう
 一番軸から奉芸
 客軸—芸を終えた軸から「下り軸」
 の囃子によって町外の芸を奉納する

5/4 <後宴> —————

- 午後 町内の祭り、奉芸
 23:00 名残り—八重垣神社の方向に軸を向
 け、千秋楽の奉芸に入る⁸⁾

・長浜曳山祭り（長浜八幡宮）

- 3/1 初寄り—祭礼執行の可否決定
 3月～4月初 準備、稽古
 4/1 総寄り—祭礼関係者が最後の決定
 4/9 線香番—狂言の長さを一定にするため
 4/9～12 夜 裸参り
 4/13 未明 起し太鼓—御幣迎えのため祭礼関係者
 を起こす行事
 早朝 御幣迎えの儀
 10:30 神輿出御の儀—八幡宮から御旅所へ
 13:00 くじ取り式
 18:00 十三日番—町内での狂言執行の準備
 はじめて曳山の舞台の上で狂言執行

4/14 <試楽> —————

- 午前中、町内で狂言執行
 午後 のぼり山—八幡宮へ曳山を曳いてゆく
 夕方 夕渡り—八幡宮から、御幣や役者、若
 衆、中老達が各山組の町内へ行列をく
 んで、帰って行く 役者は狂言の終わった時
 の衣裳 ゆっくり歩く

4/16 <本楽> —————

- 未明 起し太鼓—役者を順次起して回る。
 7:00 朝渡り—夕渡りのコースを逆に進む
 役者は狂言開始前の衣裳
 太刀渡り—長刀組の太刀渡りが八幡
 宮へ到着。
 狂言奉納—八幡宮と御旅所及びその
 間の4ヶ所で狂言執行。最後は御旅所
 神輿還御—八幡宮へ帰る
 戻り山—曳山を各町内へ戻す

4/16 <後宴> —————

- 各山組の町内で後宴狂言
 4/17 8:00 御幣返しの儀⁹⁾

上記の諸行事の内容で分かるように、異なっている点もあるが、かなり似かよっている。特に注目されるのは、垂井の「起きたり」と長浜の「起し太鼓」との関係、及び垂井の「古式練り込み行事」と長浜の「夕渡り」との関係である。両方とも共通するものが多い。「古式練り込み行事」と「夕渡り」について、もう少しくわしく見てみることにする。「古式練り込み行事」の行列の順は次のよ

うである。「軸名人の道中着を着た2人の露払いが鉄の杖を引きずりながら先頭に立つ。続いて大太鼓を2人で前後にかつぎ、1人の打ち方がつく。次に榊と幣を持った2人の烏帽子姿の子ども、さらに神轎2本・茶箱をかついだ供が続ぎ、その後、歌舞伎役者の芸児が大きなコッポ下駄をはいてつづく。紋付の羽織袴に白足袋、紅白の扇子を持った青年が、日傘をさして芸児に付きそう。年寄・中老・一般青年も正装で並び、太鼓の打出しを合図にそろりそろりと、古式豊かに町を練りながら八重垣神社にむかう」¹⁰⁾一方、「夕渡り」の行列は、「先頭に金棒引き、陣提灯(一对)、榊持ち、御幣持ち、面箱持ち、舞台方、役者と続き、最後に見送りの入った箱とのぼり(幟)がつく。役者の両側には若衆がつき、手に馬乗提灯を掲げて、役者の顔や足もとを明るく照らす。この夕渡りは、役者の顔見世でもあり、ゆっくり進む」¹¹⁾という具合である。大太鼓と陣提灯や、日傘と馬乗提灯などの違いはあるが、よく似ているといえる。以上の点からも、垂井祭りと長浜曳山祭りととは、かなり深い関係があると推測される。

次に、大垣と名古屋との関係については、大垣の山車に名古屋式が多いということが注目される。

第3の各地域間の関係については、からくり人形の山車の構造が、三ヶ所ともよく似ている点、及び山車の購入先などに注目したい。

第4の他の民俗芸能との関係については、揖斐川町に例を取る。民俗芸能としては、豊年踊・白樫踊(雨乞い)・桂古代歌踊(豊年踊・雨乞踊)・カップ踊・ねそねそ祭などがある。この中で注目したいのは、ねそねそ祭である。これは、現在途絶えているが、室町時代に端を発したであろうといわれている猿楽で、田打ちから倉入れまで田の一年間の仕事を模倣的に演じて、豊作を祈願したもので、北方に伝わっていた。

(2) 山車の成立

(ア) 揖斐祭り

享保5年(1720)、旗本岡田将監善諸が、幕府の御旗奉行に任命されたのを祝い、各町内が造り物をこしらえ、神輿の先へ渡したと伝えられている。詳細は「三輪村古記録」に記されている。

享保5年、上町が「しやぎり坊主」を拵え、神輿の先に渡した。

同7年、下町組が、幅一間・長さ二間ほどの車を拵え、その上に幅二尺・長さ二間ほどの材木をつくり、その上へ町内の若者が上り、木やり歌をうたって神輿の先へ渡すようになった。

同8年、中町組が幅一間四方の車を拵え、その上へ張り子の岩をつくり、木やり歌をうたって神輿の先へ渡した。

同9年、上町組が屋台のやまをつくった。幅七尺・長さ九尺、下幕は金らんの水引、屋台の中に高砂をおき、その下に「祈禱猿」をこしらえて舞わせた。

同11年、中町組がやまをつくり、張り子の山の上で、14、5歳の若者3人ずつがいろいろな踊りを踊った。

(イ) 大垣祭り

正保5年(1648)、藩主戸田氏鉄が八幡神社の社殿を再興した時、その祝いとして、城下の人々が車渡り物を出したといわれている。延宝7年(1679)藩主が三輦の柵車を造ったといわれている。

(ウ) 綾野祭り

横町瀬古の鯉軸の古水引幕の裏地に「宝暦九己卯(1759)九月五日綾野村横町」という墨書がある。

(ニ) 高田祭り

高田西町の猩々軸の前身は、宝暦年間(1751~64)に作られ、寛政6年(1794)に焼失したと伝えられている。からくり人形軸は、宝暦12年(1762)に古軸を名古屋伝馬町より購入した。

(ホ) 室原祭り

井畑瀬古の万歳閣の赤い幕には、宝暦3年(1753)に作られた軸が大破したことが、記されている。

(カ) 垂井祭り

文和2年(1353), 後光厳天皇が, 垂井行宮に逃れていた時, 京都の祇園社頭頭註の弟子が牛頭天王を勧請し, 北朝のために八重垣神社で祈禱を行った。その時里人が後光厳天皇を慰めるため, 花軸を造り曳き回ったと伝えられている。

伝承も含めて見ると, 垂井祭りの文和2年が最も古い。しかし, 山車が舞台作りの構造になったのは, 安永年間(1772~81)であるといわれている。また, 大垣祭りが, 名実ともに充実してきたのは, 宝暦年間(1751~64)以後のことである。だから, 西濃地方において, 山車の出る祭りが活発になったのは, 江戸時代中期以後であると推測される。

(3) 江戸時代中期の領主

大野郡三輪村(揖斐祭り)-旗本揖斐岡田氏

安八郡大垣町(大垣祭り)-大垣藩(戸田氏)

不破郡綾野村(綾野祭り)-幕府領, 明和7年(1770)幕府領大垣藩預所

多芸郡島田村(高田祭り)-幕府領, 宝暦13年(1763)幕府領大垣藩預所

不破郡室原村(室原祭り)-幕府領, 明和7年(1770)幕府領大垣藩預所

不破郡垂井村(垂井祭り)-幕府領, 寛保2年(1742)日向延岡藩(牧野氏), 寛延3年(1750)幕府領, 明和7年(1770)4月幕府領大垣藩預所, 明和7年閏6月幕府領, 享和4年(1804)幕府領大垣藩預所

(4) 江戸時代の村の状況

(ア) 三輪村

三輪村は, かつて揖斐藩(西尾氏)3万石の城下町であり, のちに旗本岡田氏の陣屋が置かれ, この地方の行政の中心地であった。村の石高は, 「慶長郷牒」によると903石余, 「天保郷帳」では944石になり, 「天保郷帳」では1,413石余になっている。ほかに松林寺領5石があった。戸数・人口は, 寛永11年(1634)に272戸, 元禄10年(1697)358戸, 1,431人, 明治2年(1869)400戸, 1,421人になっている。

また, 三輪村のかなりの部分で揖斐町(市街地)を形成し, 諸物資流通の中継地として繁栄した。明治2年村明細帳によると, 町方には, 小商い110, 酒造3, 船人7, 髪結2, 水車1, 湯風呂1があった。なお, 元和10年(1624)には, 九斎市の揖斐市が成立している。金融については, 宝暦14年(1764)に, 揖斐町の酒造屋彦兵衛が, 加納藩に対して500両を貸したという記録が残っている。交通については, 揖斐川を利用した物資流通路があり, 上り舟の終点, 下り舟の基地が近くにあった。また陸上交通路としては, 岐阜街道や揖斐街道(横蔵街道に合する)があり, 赤坂・大垣・加納・笠松・名古屋などに, 他の街道を経て通じている。

工芸については, 次のような人々が活躍した。元治2年(1865), 三輪の町人中村和兵衛が軸に塗を施している。また, 国枝桂助が嘉永3年(1850)以後に軸の彫刻(中町軸の手長足長の彫刻)を行っている。同じく工匠として, 高橋郡兵衛がおり, 中町軸及び下町軸に関係してい

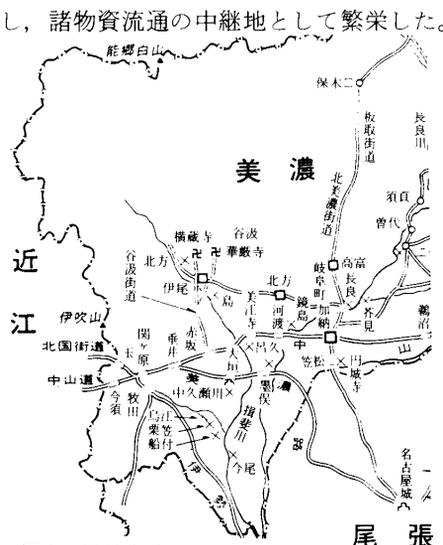


図3 近世交通図
—「角川日本地名大辞典21岐阜県」—

る。

(イ) 大垣町

大垣藩10万石の城下町で、行政の中心地として繁栄した。戸数・人口は、寛永18年（1641）に、武家屋敷を除くと、602戸であり、天保14年（1843）になると、町屋は1,383戸、5,097人になった。なお武士については、明治2年（1869）士卒族及びその家族として、戸数1,242戸、人口5,819人という記録がある。

大垣町は、城下町であると同時に、中山道と東海道を結び、東海道に付属した主要な脇往還であった美濃路（垂井宿と熱田宿を結ぶ）の宿駅としても繁栄した。また水上交通路としては、水門川岸に船町港があり、桑名・伊勢へ通じ、水運業が発達した。このように水陸交通の便がよく、家臣団や商工業者が集中していたので、領国の政治・経済の中心地となった。さらに、領主の領内市場に対する統制・掌握がすすむにしたがって、大垣町は領内の統一市場として発展した。

(ウ) 綾野村

綾野村は、寛文元年（1661）美濃国内に上野館林藩領（徳川綱吉）が設けられた時に、陣屋が設置されたことがある。村の石高は「慶長郷牒」「元和領知改帳」によると、2,206石余、「正保郷帳」では、2,426石余になっている。また、戸数は、天保9年（1838）に240戸であった。

(ニ) 島田村

島田村の石高は、「慶長郷牒」によると2,604石余、「正保郷帳」「天保郷帳」では、2,696石余になっている。戸数・人口は、元禄4年（1691）では275戸・1,488人、宝暦13年（1763）には512戸、2,266人になっている。

島田村は、在町の高田町を中心に、物資交通の要衝（今須・関ヶ原・牧田・高田湊・濃州三湊を経て伊勢・尾張への通路）として、濃州三湊とともに繁栄した。また、安政6年（1859）幕府が「海防」のための献金を募ったところ、庄六郎（50両）、市右衛門（200両）、藤太夫（200両）、友次（50両）、久治郎（50両）、藤左衛門（50両）が献金している。

(オ) 室原村

室原村の石高は、「正保郷帳」によると、1,049石余であった。天保9年（1838）の村明細帳によれば、反別90町余、戸数172戸（うち高持百姓11戸、水呑百姓155戸）、人口673人であった。

(カ) 垂井村

垂井村の村高は、「慶長郷牒」では721石余、「正保郷帳」では幕府領699石余、南宮社領22石、金蓮寺領35石、「天保郷帳」では761石余であった。戸数・人口は、天保9年（1838）に316戸・1,181人であった。

垂井村は、中山道の宿駅であり、在町を形成し、垂井宿（中山道と美濃路の接点）として繁栄した。「垂井宿家並図」によると、天保年間（1830～44）には、米搗屋10軒、肴屋・煮売屋7軒、餅飯屋6軒、草履屋5軒、鉄物屋5軒、米売4軒、大工4軒、造酒屋3軒、油屋3軒、荒物屋3軒、豆腐屋3軒などがあった。

以上から次のことがいえる。

三輪村・大垣町・島田村・垂井村は、それぞれの中心が「町」を形成していた。また不破郡赤坂村（大垣市赤坂町）も中山道赤坂宿であり、「町」であった。その他、代表的な山車が現存する所の多くは、江戸時代に「町」を形成していた。例えば、吉城郡古川町方村（古川町）、大野郡高山町（高山市）、武儀郡上有知村（美濃市）、武儀郡関村（関市）、羽栗郡竹ヶ鼻村（羽島市）である。このことから、代表的な山車が出る祭りは、町の祭りに多いことが分かる。

しかし、綾野村・室原村は、農村である。では、なぜ山車が出る祭りが起ったのであろうか。綾野村を中心に見ていく。まず注目されるのは、綾野村は幕府領（のちに大垣藩預所）だったという

ことである。当時の幕府領の農民は、「天領意識」を持ち、他藩の領民を下に見る傾向があった。この意識から、大垣藩民に対して優越感を持ち、祭りでも大垣祭りに対抗しようとして、山車を造ったのではないだろうか。山車の中身を見ると、5輛のうち3輛は、大垣と同じものである。それは、神楽軸(人形の操方は両方とも同じ)、鯨軸、猩々軸(大垣のは、戦災で焼失して復活せず)である。また、村高2,426石という大村であったことも影響しているのではないだろうか。室原村もやはり幕府領(のち大垣藩預所)であり、「天領意識」が作用したのではないだろうか。

次に、各地域の山車の成立・発展と、経済の発展との関連を見ていく。なお、「町」における経済発展の一応の目安として、人口の増減で見ていくことにする。

三輪村の場合は、次のようである。享保7年(1722)に山車が成立したといわれている。一方戸数は、寛永11年(1634)に272戸であったのが、元禄10年(1697)には、358戸、1,431人に、延享2年(1745)には387戸に増加している。また、安永4年(1775)頃に、現在の山車が完成したであろうと推測されている。それより11年前の宝暦14年(1764)には、揖斐町の酒造屋彦兵衛が加納藩に対して、500両の金子を貸している。

大垣町の場合は、次のようである。正保5年(1648)に車渡り物が出て、正徳2年(1712)に愛宕軸が完成し、宝暦年間(1751~64)以降充実したといわれている。一方戸数(土屋敷を除く)は、寛永12年(1635)549戸であったのが、慶安2年(1649)には735戸に、さらに元禄8年(1695)には760戸、延享2年(1745)には809戸に増加している。

島田村の場合は、次のようである。宝暦年間に山車が造られたり、購入したりした。一方戸数は、元禄4年(1691)に275戸であったのが、延享元年(1744)に447戸、1,961人に、宝暦13年(1763)に512戸、2,266人と増加している。また猩々軸は、天保15年(1844)から安政4年(1857)にかけて立派なものにした。この費用は、半額を町内各戸の負担とし、残りは有力者7名が負担した。なお、安政6年(1859)には、幕府の「海防」献金に対して、庄六郎の500両をはじめ6名が、総額1,050両を献金している。

垂井村の場合は、次のようである。安永年間(1772~81)に、山車が舞台作りの構造になったといわれている。一方戸数は、寛文5年(1665)105戸であったのが、享保2年(1717)に225戸、寛政3年(1791)に324戸と増加している。

以上のことから、「町」の経済的な上昇期に山車が造られ、改造されていることが分かる。いわば、山車は町民の経済力の象徴であったといえる。

4 おわりに

山車が出る祭りは、原則的に「町」の祭りであり、それも江戸時代中頃の町民の経済力が上昇した時に生まれたものであるといえる。

なお、西濃地方の山車は、岐阜県重要有形民俗文化財として指定され、現在も祭りに使われているものが、揖斐川町に5輛、大垣市に14輛、養老町に6輛、垂井町に3輛ある。いろいろな種類の軸があるが、奉納芸で分けると、大きく2つになる。1つは子供歌舞伎であり、他はからくり人形である。なぜそのように異なるのかは、今後の課題として、総合的に研究していきたい。

参考文献

- 1) 「現代社会」では、大項目「現代社会と人間の生き方」の中に、中項目「人間生活における文化」があり、その小項目に「日本の生活文化と伝統」がある。また、「日本史」では、「内容の取扱い」の(1)の最後に「生活文化の取扱いに当たっては、民俗学などの成果を活用して、その具体的な様相を把握させるようにする」と書いてある。同じく「内容の取扱い」(4)の主題学習の所では、主題設定の観点の1つとして、「衣食住、年中行事、冠婚葬祭、生産用具などの生

活文化の展開を、社会との関連において学習できるもの」というように書いてある。

- 2) 三隈治雄「日本民俗芸能概論」東京堂出版 昭和47年、181頁
- 3) 宮田登「日本民俗文化体系9 曆と祭事＝日本人の季節感覚＝」小学館 昭和59年 第7章二宮尾慈良「アジアの祭り」487頁
- 4) 山崎久松〈構成〉「曳山人形戯現状と研究」東洋出版社、昭和51年
「岐阜県指定文化財調査報告書第八巻」岐阜県教育委員会、昭和40年、15～7頁
「 同上 第十三巻」 同上 昭和45年、64～7頁
「 同上 第十七巻」 同上 昭和49年 59～64頁
「 同上 第二十四巻」 同上 昭和56年 35～9頁、40～3頁
「 同上 第二十五巻」 同上 昭和57年 38～42頁
- 5) 藤田黎三の「美濃地方の山鉾の分類と分布」(「美濃民俗」第115号)によると、上記以外に、大垣市静里(戦前2台あったが現在廃絶、型式不詳)、大垣市長松(戦前長浜式屋台3台あったが廃絶)、墨俣町(以前4町内より踊屋台を出したが廃絶、型式不詳)、平田町今尾(型式不詳)、海津町高須(名古屋式屋台1台、長浜式に類似した屋台2台)、垂井町(南宮神社に置山1台、二層屋台1台)が記されている。
- 6) 「垂井町史通史編」垂井町役場、昭和49年 526頁
- 7) 西川丈雄解説・吉川宏輝写真「重要無形民俗文化財指定長浜曳山まつり—こども歌舞伎—」京都サンブライツ出版、昭和54年
- 8) 「岐阜県郷土資料(24)岐阜県の郷土芸能」岐阜県教員委員会、昭和58年、13・4頁
「垂井町史通史編」前掲書、804～7頁
- 9) 西川丈雄前掲書 98～103頁
- 10) 「岐阜県郷土資料(24)岐阜県の郷土芸能」前掲書 14頁
- 11) 西川丈雄前掲書 101頁

上記以外の参考文献

- ・伊勢宗治編「高岡御車山と日本の曳山」高岡市教育委員会社会課、昭和32年
- ・本田安次「民俗藝能の研究」明治書院、昭和58年
- ・和田唯男「大垣八幡神社史」大垣八幡神社、昭和54年
- ・三隅治雄他編「民俗芸能事典」東京堂、昭和56年
- ・「角川日本地名大辞典21岐阜県」角川書店、昭和55年
- ・「揖斐川町史通史編」揖斐川町、昭和46年
- ・「新修大垣市史通史編一」大垣市、昭和43年
- ・「養老町史通史編上」養老町、昭和53年
- ・「 同上 下」同上 昭和53年
- ・「赤坂町史」赤坂町役場、昭和28年
- ・「上石津町史通史編」上石津町、昭和54年
- ・「池田町史通史編」池田町、昭和53年